
東方馬鹿者語

放浪 旅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方馬鹿者語

【Nコード】

N9440Z

【作者名】

放浪 旅人

【あらすじ】

二十歳なのに見た目は可愛い系中学生レベル！
頭は小学生以下！
そんな、少年？青年？の物語

ネタバレあり主人公設定（前書き）

ハイ。タイトルどおりです。

それでもかまわない方はどうぞ。

ネタバレあり主人公設定

名前

気楽 天

読み

キガク テン

容姿

童顔で身長が低い。

コンプレックス

さらさらの黒髪にたれ目。

女装がよく似合う。

ちゃんとしていても、二十歳なのに可愛い系中学生レベル。

性格

二十歳なのに子供っぽい。

名前の通り気楽な楽道家。よく甘える。

アホの子

職業

旅人（無職？）

風の向くまま、気の向くまま。

あっちこっちを行ったり来たりしている。その為、顔は広い。
ただ、金はない。

能力

流れを操る程度の能力

なかなか応用の利く能力で使いやすい。

使用例

妖怪に襲われた時に攻撃を受け流し、逃げ去る。

魔法の森のキノコ胞子を風の流れを操り、散らばせる。
その他諸々

説明

外人なのか幻想郷の人なのかよく解らない。

幻想郷ではかなり謎のある人物。（しかし、アホなので、あまり気にされない。）

その内バカルテット+1になるのではないかと噂。

ただ、アホなのだが、職業柄感覚は鋭い。

童顔、低身長はNGワード、口にすると、体育座りで泣き出す。

以前、紫の家に迷い込んだ時に女装させられ、それ以来紫と女装は苦手。

しかし、藍に逃がしてもらい、藍に懐いた。

橙ともその時仲良くなった。

（精神年齢が同じ…？）

逃げ足はとてつもなく速い（幻想郷、最速？）

天より一言

「こんな小説だけど宜しく願います！」

……アホ、アホ書いてあるけど、そこまでアホじゃないよ？

……え？ $2 + 4$ ？

……6？

……え！？違うの？

本当は8？…ありがとう。また一つ賢くなったよ。
「バイバイ！」

ネタバレあり主人公設定（後書き）

今後、設定と食い違う事がありましたも、あまり気にしないで下さい。

作者はアホですから。

マイナス1 腐った心(前書き)

天の昔の話です

マイナス1・腐った心

治安の悪い街でオレは生まれた。

生まれたのは良かったが問題はオレは生まれて、物心ついたらすぐに捨てられたという事だ。

まあ、治安の悪い此処で捨て子なんて珍しくもないが、やはり生き延びるのは難しい。

毎日餓死する奴を、オレは見ている。

最初の内は悲しみもしたが、今は何も感じない。

そんな日々を送っていると学ぶ事もある。

……生き延びる方法だ。

普通は勉強して、働いて、金を稼いでメシを食う。

それが、普通の生き延び方だが。

オレは違う。

犯罪を繰り返し、金を奪い、メシを食らい生き延びた。

当然、学校は行ってないから馬鹿だ。

しかし、その生活には不満は無い。

唯一、不満があるとしたら、親が居ない事だ。

やはり、子供心に寂しいものだ。

…まあ無い物ねだりは、意味がない。

金も無くなってきたし……

「仕方ねえ、強盗でもするか。

ああ、メンドくさい。」

罪の意識を感じない、オレはどこまで腐っているんだ？
そんな事を考えながら、オレはターゲットを探しに出掛けた。

くとある人気の無い道

「くくく」

やっと見つけた。

なかなか、金を持っていきそう。

しかも、女だから簡単に金を奪える。今日のオレはついてる。

女は気付いてないみたいだし、転ばせてさっさと金を奪おう。
それが一番やりやすい。

ドンッ！

「きゃあ！？」

やっぱり簡単だ。

今回も簡単に金を奪えた。

「おっ！結構あるじゃねえか。これなら、今日は上手いモンが喰え
そうだ。」

金を奪えた事だし、さっさとかえ……

「待って！！」

「ああっ！？」

チツ、また被害者の戯れ言か。くだらねえ、さっさと帰ろう。

「貴方、天でしょ……？」

「！？」

……何で、この女オレを知ってやがる！

指名手配されていても、名前は知られていないのに。

「テメエ、何故オレの名前を知ってやがる。」

「やっぱり、天だったのね。」

「ほら！私よ、貴方のお母さんよ。」

………は？

今、何て言いやがった？

お母さん、だと？

確かにオレの名前を知っている奴はいない。

知ってるのは、親ぐらいだろう。とすると、コイツはオレの母親？

「………今まで、オレを見捨てておいて母親面だあ？

ふざけるなッ！」

オレはぶちギレた。

オレの薄汚い身なりに比べると流石は金持ち、綺麗な指輪にネックレス。

苦勞を知らない顔をしている。

「テメエが上手いメシを食っている時、オレは腐りかけのメシを食っていた。」

そんな金持ちがオレの名前を呼ぶなッ！」

「ッ！ごめんなさい。」

でも、貴方を育てるだけのお金があの時は無かったの。」

やめろ、止めろ、ヤメ口。オレを惑わすな！オレを見るな！

「でも、今は貴方と暮らせるだけのお金もあるわ。

……また、一緒に暮らしましょう？」

「……………」

もう、堪えきれない。

オレは女に無言のまま近づいた。

罪を犯す内に死んだ子供心が息を吹き返す。

ひとつの雫が頬を濡らす。

女の直ぐ前に近づく頃には、それはもう流れだしていた。

「母さん。」

オレが言った言葉はそれだけだった。

しかし、母さんは満足そうに笑うと。

「行きましよう？」

と言って歩きだした。

オレは母さんの後ろをついていった。

人気の無い道に貼られた手配書が、オレの新しい人生を祝福するかのように。

風に揺れた。

0 ・壊れた過去と能力（前書き）

天の能力のきっかけの話です。

0・壊れた過去と能力

人気の無い道での強盗から、一カ月。

天は比較的治安のいい、街に移った。母親の強い意向によるものだ。

「天、起きているかしら？そろそろ、朝食にするわよ。」
母親の声で、天は目を覚ました。

「わかった、母さん。
今、いくよ。」

天は母親と暮らして、困った事が幾つかあった。

先ずは身なり。髪はぼうぼう、目はギラギラ、治安のいい場所で暮らすには不味いという事で、急遽直された。

次は言葉遣い。母親はそういった事に厳しく、乱暴な言葉遣いは減った。

しかし、一番困った事は、環境の違いで一カ月間、眠れない事だ。母親が心配して毎日確認をするのだが、やはり眠れない。

それでも、天は満足していた。親がいるという事に。

カチャカチャ。

「天、眠れないみたいだけど大丈夫？」

「大丈夫だよ、母さん。」

心配しなくても、いいって。」

「そう？じゃあ、今夜睡眠薬を買ってきてあげるわ。そうすれば、眠れるわ。」

「ハハッ、ありがとう。」

会話はぎこちないながらも、少しずつ続くようになった。それに比例して、天も母親に年相応に甘えるようになった。

（～1時間後～）

朝食を終え、母親が仕事に出掛けた家で天は考えていた。

「僕もこの一カ月で随分変わったなあ。」

一週間前は少しは有名な犯罪者だったのに。「誰に話し掛けるでもなく、天は淡々と喋っていた。」

そして、不意に思った。

「自分が幸せになって良いのか？」

幾ら生きる為とは言え、人を殺さなくても傷つけた事はあった。

そんな自分が……

「幸せになって良いのかなあ？」

それっきり天は口を閉ざして、天井を見つめていた。

「ただいま」

母親の声で天は我に返った、どうやらずっと天井を見つめていたらしい。

「お帰り。母さん。」

「天、睡眠薬買ってきて来たわよ。夕飯の後に飲んでみてね。」

「ありがとう、母さん。」天はさっきまでの考えを頭の奥に追いや

った。

くく夜、10時頃くく

夕飯の後に飲んだ、睡眠薬が利いたのか天は眠っていた。

ピーポー、ピーポー

「う、ううん」

しかし、聞き覚えのある、天敵の音に目を覚ました。天は眠気が残っていたので、すぐに眠ろうとしたが、違和感を感じて動きを止めた。

おかしい。何かがおかしい。

音がおかしい？イヤ違う。

数がおかしい？イヤ違う。

時間がおかしい？イヤ違う。

……場所がおかしい。

誰だって、自分の家の庭でサイレンが鳴ればおかしいと思うだろう。

自分の家では無い事を祈りながら、外を見ようとしたその時。

ガチャツ！

沢山の銃を持った警官と自分の母親が一人、部屋に入ってきた。

リーダーであろう警官が高らかに「気楽 天、お前を逮捕する！」

と叫ぶと天は警官にあつという間に拘束された。

何故？と、天が茫然としていると母親がニヤニヤしながら、話し始めた。

「うふふ、貴方、自分の首にどのくらいお金が懸かっているかわか
ってる？」

「あ、ああ……」

しかし、天は答えない。

否、答えられない。頭では理解していても、心がそれを拒絶する。

「ホント、運が良かったわ。

あの人気の無い道で貴方を見たときは喜んだものよ？まあ、安全に
寝込みを襲おうとした時、貴方が寝ない事には困ったけどね。」
母親はうふふ、と笑う。

「うつつ、くつつ。」

やっと理解した、理解してしまった。自分の状況を。睡眠薬を買っ
てきた意味を。

毎日、寝ているか、確認してきた訳を。

「さて、警官さん？」

もう連れていって下さい。あっ！お金は後日持ってきて下さいな。」
そんな天など、お構い無く母親は取り引きをしていた。

そして、警官に連れていかれる時。天は母親を信じ、聞いた。涙を

流しながら。

「母さん、僕を愛していてくれた……？」

母親は笑いながら答えた。

「ええ、愛していたわ？」

金ヅルとしてね。」

天は鳴いた、泣いた。

喉が枯れるまで鳴き叫び。

涙が枯れるまで泣き叫んだ。

〳〳 刑務所内 〳〳

一週間後、天は懲役二十年の判決を受け独房で考えていた。いや、思い出していた。

母親との短い、幸せな生活を。

しかし、母親の最後の言葉までも思い出し。

苦しんだ。それを繰り返し返した。

そして、流れていく悪循環の内に、天は壊れ、記憶を失った。

体の成長の流れを止めて。

心の成長の流れを止めた。

そして、自分の存在そのものを流し、彼は忘れられた者の楽園、幻想郷に辿り着いた。

0 ・壊れた過去と能力（後書き）

誤字脱字や感想がある方は宜しくお願いします。

1・主人公はバカだった（前書き）

初の連載小説です。

短編の時よりひどいかもです。ハイ。

キャラ崩壊もあります。ハイ。

さらに、かなり短いです。ハイ

それでもよければどうぞ。

駄目な方はお手数ですが、ケータイの戻るボタンを押して下さい。

1・主人公はバカだった

ここは魔法の森。

危なげなキノコが沢山生えており、そのキノコから幻覚作用のある胞子が舞っているとても危険な場所だ。

しかし普通の人間は1分も保たないようなこの場所で人間が一人で食事をしていた。

「うーん、狼の肉は少し固いなあ。

たまには、美味しい物も食べたいし……」

胞子の事などお構いなしに、狼の肉に嚙り付きながらうんうん、唸っていた。

彼の頭の中は美味しい食べ物の事でいっぱいだった。

……もう一度繰り返すが、ここは魔法の森。

人食い妖怪や、幻覚作用のあるキノコ胞子が沢山ある。

普通の人間にはとても危険な場所である。

食べ物の事など考える余裕がない場所である。

一時間程うんうん唸っていたが、いきなり立ち上がって呟いた。

「そつだ！人里に行って団子屋に行こう！」

紹介が遅れたが、このアホそうな子は気楽 天。

(キガク テン)

女装をして、12歳の少女です。と言えば通じてしまいそうだが、二十歳の男性である。

本人はコンプレックスらしいが、身長が低く、童顔なので仕方ない。

「？今、誰か僕のことを褒めたのかな？

何か聞こえたけど……」

……気楽なアホである。

「まあ、いいや。

そんな事より、団子屋！団子屋！」

そんな事を叫びながら、彼は人里に向けて走りだした。

……三十分後……

彼は黒い玉から逃げていた。

「わはは 待つのだ」。

私の獲物」

中からは時折、天と同じアホっぽい声が聞こえていた。

「ヒイツ！ま、待てルーミア！能力を解いて、僕を見て。」

どうやら、黒い玉の中に知り合いが居るらしく、必死に説得していた。

彼はガ○ツの玉○が知り合いなのだろうか？

「あれ？その声は天なのか？」

そう言って出てきたのは、○ンツの○男ではなく。

赤いリボンに綺麗な金髪をした、幼じよ……少女だった。

「全く、ルーミアも確認しなきゃ。」
友達を食べるところだったよ?」

「ごめんなのだ。」
でも、お腹すいたのだ。」

「ふーん、でも人食いは駄目だよ。
じゃ!僕人里行くから」
と言って天が歩こうとすると……
ガシッ!

ルーミアが腕を掴んでいた。

「あの〜?」
ルーミアさん? 僕、もう行きますよ?」

「ゴハンちよ〜だい!」
良い笑顔である。

「いや、だから僕は今から人里に「ゴハンちよ〜だい!」……」
変な会話である。

「よかろう!僕のクイズに答える事が出来ればな!」
「わは〜。来いなのだ。」

「行くぞ! 4 × 6 は?」

「……じ、10なのか?」
「フッフッフ、答えは!」
「答えは?!」

嫌な予感がする……

「46だ！」
嫌な予感的中してしまった。

「そ、そーなのかー！」
納得してしまった。

「そーなのだー！」
という訳じゃあね〜」

「悔しいけど、バイバイなのだ〜。」

……変な会話ではなく、アホな会話だった。
こんなんで、大丈夫なのだろうか？

1・主人公はバカだった（後書き）

……短い。

しかも、いつもひどいのになおさらかもしれないです。ハイ。

2・人里でバッテリー(前書き)

やはり短いです。ハイ。

駄文ですが、どうか楽しんで下さい。

2・人里でバツタリ

「いや、やっと着いたね。」

さて、団子屋 団子屋 「

少年？移動中」

「おや？慧音さんじゃないですか！

団子屋にいるなんて、珍しいですね。」

そこにいたのは、人里の守護者でありながら、寺子屋の教師でもある、上白沢慧音だった。

慧音は少し驚きながら応えた。

「ん？天か。お前の方こそ珍しいな。職に就かず、旅をしている奴が戻ってくるなんて。」

天は頭を掻きながら

「いや、団子を無性に食べたくなっちゃいまして」と笑った。

「ほう？団子を？」

しかし、慧音は一切笑わずに、言い放った。

「……だが、働いていないのに金はあるのか？」

天は笑顔のまま固まった。そりゃ、そうだろう。

団子屋だって商売なのだから当たり前だ。

「……………」

しかし、天はすっかり忘れていた。

今まで、狩りで食事をしていたので仕方ないが。

「はあ、働いてないから、無いよな？」

全く、いつか紅白の貧乏巫女のようになってしまうぞ?」

「……」

まだ、固まっている。

死んでるのではないだろうか?

団子が食べれなくて、シヨック死なんて笑い話にもならない。

……いや、幻想郷でならなってしまうそうで怖い。

「慧音さん!」

突然、動いたので流石の慧音も驚いていた。

ナレーションである私も、主人公は死んだと思い、帰る支度をしていたので驚いた。

「な、何だ?いきなり。

少し驚いたぞ?」

そんな慧音の言葉も構わずに天は動き出した。

「団子、奢って下さい!お願いします!」

……土下座である。

日本古来より伝わる奥義を天は使ったのだ。

天は期待を込めてちらり、と慧音を見ると彼女は少し仰け反っていた。

刹那、有り難いお言葉と共に衝撃が天の頭を襲った。

「だったら……真面目に働け!」

ガコン!!

「ご、ごもつともです。

……ガクッ」

結局奢ってもらい、天はいま団子を頬張っていた。

代償は頭の割れるような痛みだが。

「いひゃ〜、へいへはん。ふぁんぐ、あひはどござまぶ。」

*通訳（いゃ〜、慧音さん。

団子、ありがとございます。）

「こらこら、飲み込んでから喋れ。

全く、見た目同様子供っぽいな……」

慧音は言ってしまった。

天へのNGワードを。

「!?!?!?!?!?ごくん。」

天は団子を飲み込むと体育座りになって、ぶつぶつ言い始めてしまった。

「ひっく、どうせ僕は童顔だよ〜。ううっ。

どうせ僕は中学生レベルだよ〜。ひっく。

どうせ僕は……」

今にも泣きそうだ。

普通、二十歳の男が泣いたら。

あまり罪悪感はないが、天は中学生に見える。

幾ら悪気はないとは言え、泣かせるのはマズい。

そして慧音が出した答えは一つ。

「わかった！悪かった！
団子をもつと食べて良いから泣かないでくれ！」
団子の追加だった。

寒くなった自分の財布をみて、慧音は思った。

……何故私は二十歳の男の子守りをしているのか？
そう思うと今度は慧音が悲しくなった。

2・人里でバッテリー（後書き）

感想があればお願いします。

批判でもいいので、感想が一つあるだけでも凄く嬉しいですから。

それではこのへんで……

3・人里の人形遣い

慧音の財布を壊滅状態にした天はとてもニコニコしながら歩いていた。

どこに行くなんて決めていないが、とりあえず面白い事がないかな？と考えながら。

「む〜？何だろう？

あの、子供達の群れは？

面白そうだし、いつてみよ！」

天が子供達の群れに突撃すると、そこでは人形劇をやっていた。

「わ〜！すごい、すごい！人形が生きてるみたい！」

……確かに人形劇も凄い。しかし、ナレーションの私は二十歳の男を子供達と見比べて、あまり変わらないという事実も凄いなと思った。

〜一時間後〜

天は人形劇をやっていた人に、話し掛けていた。

「アリス、すごかったね〜。

人形が生きてるみたいだったよ！」

「あら？天じゃない。

ありがとう、嬉しいわ。」

彼女の名前はアリス・マーガトロイド。

マーガリンと間違っではいけないし、不思議の国にも住んでいない。

強いて言うなら魔法の森に住む、魔法使いである。

……友達は少ない……

「ナレーションは、私にケンカ売ってるの？」

「いえいえ、そんな事はありませんよ？」

〳〵閑話休題〳〵

「そうだ！」

「ねえ、アリス。紅茶頂戴？喉渴いた！」

何でこんな子供っぽくなってしまったんだろう……
作者も頭を悩ませている。

「はあ、仕方ないわね。」

「どうせ、言っても利かないだろうし。」

「いいわよ、私の家にきなさい。」

「やったね ありがとう。アリスの紅茶は美味しいんだ。」

〳〵少年？少女移動中〳〵

「いや、しかしアリスも変だね。」

こんなキノコ胞子だらけの場所に住むなんて、普通の人間は耐えられないよ？」

「そんな、天の質問にツンとすましながらアリスは答えた。

「おあいにく様、私は魔法使い。」

「この、瘴気が心地よいのよ。」

「ふん。変なの。」

「まあいいや、早く入ろう？」

他人の家なのに凄く、厚かましい。

どこかのモダンな白黒魔法使いを越えるのではないだろうか？

「あっ、勝手に入ったら危ないわよ。」

「えっ？」

ガチャ！

どうやら、少し遅かったみたいだ。

瞬間、天の頬を何かがかすめる。剣だった。

「シャンハイ！シャンハイ！」

そんな声？と共に剣の持ち主が姿を現した。

人形でした。

「し、上海？危ないから、その剣を降ろして？」

流星のお気楽な天も、この時ばかりは顔面蒼白。

そんな天に上海は名残惜しそうに、剣を降ろした。

「……ねえ、上海？」

何で名残惜しそうなの？

もしかして、僕の事嫌い？」

しかし、必死に上海は首を振りながら、否定した。

「シャンハイ！シャンハイ！」

シャンハ、シャンハイ！！」

……否定した？

「うんわかった。」

これには深い理由があるんだね。
何、言ってるか解らないけど。
その必死な仕草を見れば解るよ。」

「どうでもいいけど、早く紅茶を飲みましょ？」
と、ほほ空気同然のアリスが口を開いた。

「うんわかった。」

そして、二人と一体は家の中へと入っていった。

4・白黒と女装と

天がアリスの家に踏み込むと、

「おっ！アリスに天。」

邪魔してるぜ！」

モダンな白黒魔法使いがそこにいた。

「魔理沙じゃん。また泥棒してるの？」

「あ、あら。魔理沙じゃない？どうしたの？」

……もしかして、私に会いに来てくれたの！？」

「いや、違うぜ。」

暇だから、遊びに来たんだ。」

と、アリスの質問をバツサリ切り捨てた少女の名前は、霧雨魔理沙。魔法の森に住む、普通の変人である。

「いや、おかしいだろ！」

私は普通の魔法使いだけ！……アリスの時からだが、ナレーションは魔法使いに恨みでもあるのか？」

そういう発言は止めてほしい。

因みに恨みはない。

~~~~~閑話休題~~~~~

今現在、三人は優雅にお茶会を楽しんでいた。

「あつ！天、これは私のクッキーだぜ！」

勝手に食べるな。」

「ハハツ、何を言っているんだ魔理沙。早い者勝ちだろ？」

「……この魔理沙のティーカップに、えーりん特製の惚れ薬をいれて…（ボソツ）。」

ギャー、ギャーワー、ワー

……優雅なお茶会？

~~~~しばらくして~~~~

「時に、アリス。」

お前は天の噂を知っているか？」

魔理沙が意地悪く言つと、天はびくりと肩を震わせた。

「天の噂？何よそれ。」

そうアリスが聞くと魔理沙はフッフッフツと笑いながら答えた。

「何と。」

天は女装させると、可愛いらしい。」

それを聞いた瞬間天は逃げ出そうとしたが、魔理沙によって敢えなく失敗に終わった。

「で？それがどうしたの？私にどうしろと？」

「いやいや、アリスには天の服を見積もって欲しいんだ。」

「駄目よ、そんなの。」

いくら何でも、天が可哀想よ。」

天は味方がいたと喜んだが、魔理沙の上目遣いにノックアウトしたアリスをみて黙った。

なんとも可哀想な主人公である。

「じゃあ魔理沙、こんなのどうかしら？」

アリスがどこからともなく出した服は、外の世界でいう、セーラー服だった。

「アリス！何だしてんの？まさか、僕にそれをきせようと……」

「そのまさかだぜ」

「じゃ、上海。」

天の着替えよろしくね。」

「シャンハイ！」

「えっ？ちよ、上海。」

や、止めてウワアア！」

上海によって、天は瞬間にセーラー服になってしまった。

「ウウツ、ヒック、

ひどいよ、二人とも。これじゃあ……

ウワアアアーン！」

ついに泣き出した天はどこかに逃げ去ってしまった。

「ねえ、魔理沙。」

「な、なんだぜ？アリス。」

「アレって、天だったのかしら？普通に女の子だったわよ。」

「私もアイツが男と言い切れる自信が、無くなってきたぜ……」

「シャンハイ……」

二人と一体は呆然と立ち尽くしていた。

ナレーションの私も口をあんぐりと開けてしまった。

くくその頃人里くく

「お嬢ちゃん、一緒に遊ばないか？」

「お嬢ちゃん、お茶でもどうだい？」

「お嬢ちゃん、団子を食うかい？」

「僕は男だつてー!!」

その後、天は慧音が見つけてくれるまで、里の男に囲まれていた。

4・白黒と女装と(後書き)

活動報告に質問があります。

タイトルは「質問」です

出来れば、答えて欲しいです。

解答お待ちしております。

お知らせ（前書き）

お知らせです。

お知らせ

えーと、先ずは本題です。

東方馬鹿者語を更新停止致します。

まあ、私の小説など興味ないと思いますが、報告致します。

簡単な理由としては、あるコメントに主人公のキャラクターがキモすぎて池沼みたい、という酷評を頂いたからです。

私は池沼が意味がわからないので調べてみたのですが。

……酷い意味でした。

余りの酷さにそのコメントは削除しましたが。

もう、この作品の創作意欲が湧かなくなりました。

無責任だ！と思う方がいると思いますが、仕方ありません。作者はネガティブなので。

ただ、また連載小説を書くので良ければ見てください。

最後にこんな駄作を読んで頂きありがとうございました。

お知らせ（後書き）

精神的に打たれ弱くて、申し訳ございません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9440z/>

東方馬鹿者語

2012年1月4日09時51分発行